

## 日本の高校生への英語指導法

### ーテレビドラマの使用と Rational Cloze Procedure からのアプローチ

滝村 裕子

#### 要旨

本稿の目的は、内容理解につなげるために背景知識としてテレビドラマを使い、Rational Cloze Procedure を中心に多角的な指導法を用いた際に、日本の高校生が「読むこと」を通してどのような英語学習が可能であるかを検証するものである。具体的には、海外の第二言語習得の先行研究 (Siok H. Lee, 2008) を「文法訳読教授法」に慣れている日本のある高校生に対して応用実践できるかどうかということをアクション・リサーチの形式で検証した。結果は4種類のテストとアンケートから Lee (2008) の先行研究の一部と同様のものとなり、内容理解や受容語彙数の増加につながる可能性、教員と生徒間の双方向の対話型授業の有効性という結果が得られた。

**キーワード：**日本の高校英語教育、内容理解、Rational Cloze Procedure、テレビドラマ、英語指導法

#### 1. 研究の背景

2009年度の『高等学校学習指導要領解説』では、それまでの「オーラル・コミュニケーションI」、「オーラル・コミュニケーションII」、「英語I」、「英語II」、「リーディング」、「ライティング」に代わり、「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語I」、「コミュニケーション英語II」、「コミュニケーション英語III」、「英語表現I」、「英語表現II」、「英会話」という新しい科目が設けられた。また、「コミュニケーション英語I」、「コミュニケーション英語II」、「コミュニケーション英語III」の共通の目標は、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」である。一方、日本の高等学校の英語の授業では「文法訳読教授法」を主に使用している教員 (Gorsuch, 2001; 吉田・宮崎, 2011) がいる。『高等学校学習指導要領』が求める目標達成には、英文の意味や文法を確認する指導法である「文法訳読教授法」だけでは不十分である。金澤 (2013) は、「文法訳読教授法」の「問題点として、文法構造の解説と日本語の翻訳にとどまることが多いため、音声の指導あるいは英語を使った言語活動が軽視されがちである」(p.19) としている。文法や構文の解説が多くあれば授業の進度が遅くなる可能性がある。それにより読む量は少なくなることが考えられる。英語を

読む機会や量が少なければ、英語を読む習慣も減ることは想像に難くない。

しかし、「文法訳読教授法」に効果がないというわけではない。生徒が同じ母語を共有している教室では、理解を確認する手段として有効である（金澤, 2001）。また、大田（2001）は読むべき内容次第では、正確な文章の理解、文法や構造の理解、抽象的な表現の理解、修飾関係の把握、文体の把握など効果的に **bottom up** 処理（単語ひとつひとつの小さな単位から、文、段落、テキスト全体を把握するという積み木を積み上げるような読み方）（渡辺, 1996）を強化できるというメリットがあるとしている。しかし、読解には多くの研究者が言及するように **bottom up** 処理と **top down** 処理（テキストの内容を「予測」したり、必要な情報を「素早く検索」したり、限られた時間にテキストの概要を理解して「すくい読み」をしたり、分からない「単語を文脈から予測する」読み方）（高梨・卯城, 2000）のバランスの取れた読み方が必要である（Carrell, 2000）。ゆえに、注意しなければならないことは、読解指導において **bottom up** 処理を中心とした指導に偏りがあってはいけないうことである。なぜならば、「文法訳読教授法」に慣れた生徒は **top down** 処理をする機会が奪われてしまう可能性があるからである。また、局所的な読み方（**local reading**）に慣れてしまうと、それだけでは全体的な読み（**global reading**）があらわれない可能性もある（卯城, 2009, p.10; 大田, 2013, p.43）。

本論文は、「文法訳読教授法」からの脱却を目標にした指導法、そして授業内で「英語を通じてコミュニケーションを図ろうとする姿勢」につながる新たな指導法を検証し評価することが目的である。具体的には、パイロット授業<sup>1</sup>で得られた「映像と物語を用いた英語の授業」で英語を読む動機づけにつながった結果をもとに、先行文献の Lee（2008）の論文の一部を用いて、一文一文英文を訳すことをせずに英文を理解することを通して、英語学習にどのような影響があるのかを検証する。

## 2. 先行研究

本研究は Lee（2008）の研究結果の一部を参考にし、それを応用した。Lee は、カナダに住む平均 13.8 歳の English as a Second Language（ESL）の生徒 39 名を対象に、ディズニーのビデオ『ムーラン』を観た後に、その概略が書かれている英文の Rational Cloze Procedure（RCP）の活動を行うことで「読むこと」、「書くこと」、「語彙」にどのような影響を及ぼしているかに注目した。RCP とは、Alderson（2000）の gap-filling procedure に類似しており、テスト作成者が意図的に抜き出す語を決めて英文に空所を作るものである。これは、日本の英語のテキストやテストで用いられる「空所補充問題」と類似しているとも言える。次がその結果である。

1. (a) 「四択語彙テスト」で ESL グループは単語と語句の受容語彙数に伸びがあった。

また、Native Speakers（NS）グループとの比較では語句の受容語彙数にほとんど差がなかった。

- (b) 目標語を異なる文章の中で応用できるかどうかは、ESL のレベルによって差がある。

しかし、個人差はあるものの概ね RCP は効果的であった。

2. 単語に関しては、未知の語彙から発表語彙への語数の習得率が最も高く、語句に関しては、未知の語句から受容語句への語数の習得率が最も高かった。
3. 学習者の 92.30% が、RCP を伴う活動の中での教員と学習者のやりとりが他の活動に比べて効果があると感じていた。
4. 学習者の 87.18% が、要約を書く際に RCP で使われた英文が役に立ったと認識していた。

以上の結果より、ビデオを観た後に RCP を行うことは「読む力」、「書く力」、「語彙力」それぞれを身に付ける可能性があるだけでなく、統合的な英語学習による習得の可能性が十分にある。また、教員と生徒間の双方向対話型授業の有効性を示している。これは映像媒体を用いた生徒と教員の双方向の授業のスタイルに効果があることを示唆している。生徒間のディスカッションを取り入れた授業の必要性 (Honeyfield, 1987)、あるいは生徒と教員とのインタラクティブな授業の重要性 (Lee, 2008; Bahous, 2011; Dörnyei and Ushioda, 2011) は、他の研究授業で取り入れられ、その効果が実証されている。Lee の研究結果は、従来の日本の英語の授業とは異なる側面があり、一つの指導法として日本の高校で実践可能であるか検証する価値があると考えられる。

本研究では、Lee の論文にある ESL 学習者への語彙学習指導の一部を English as a Foreign Language (EFL) 学習者である日本の高校 3 年生に応用可能かどうかを検証する。

### 3. 研究授業

#### 3.1 目的

背景知識としてテレビドラマを観た後に、物語を読み、その要約となる RCP の活動を中心に行ったとき、語彙数の増加やその他の英語学習に影響があるかどうかを検証する。

#### 3.2 検証内容

- 1) ドラマを観て物語を読んだ後の RCP の活動は、受容語彙と発表語彙の語数に影響を与えるか。
- 2) RCP の活動による語彙習得の効果について学習者はどのように考えているか。
- 3) ドラマを観た後の RCP の活動は、他のどのような活動とともに行うことでより語彙習得が効果的になると学習者は考えているか。

#### 3.3 検証方法

- 1) 受容語彙数の習得の検証として「四択語彙テスト」と「あらすじの空所補充テスト」を使用する。この 2 種類のテストについては pre-test と post-test を実施する。
- 2) 発表語彙数の習得の検証として「Sentence level C-Test」、「あらすじを書くテスト」を実

施する。

3) RCP に関する生徒の意識調査として「アンケート」を行う。

### 3.4 参加者

参加者は、埼玉県の中堅レベルの私立高等学校3年生28名である。進学目標別に5つのコースから編成されており、この論文では次のようにコースを示すことにする。

- ・コースi : 「国立私立最難関大学を目指すコース」 … 男子1名 女子0名
- ・コースii : 「国立私立難関大学を目指すコース」 … 男子1名 女子5名
- ・コースiii : 「私立難関大学を目指すコース」 … 男子0名 女子3名
- ・コースiv : 「中堅私立大学を目指すコース」 … 男子2名 女子12名
- ・コースv : 「スポーツに特化したコース」 … 男子0名 女子4名

また、28名全員が高校3年間の英語の授業で「文法訳読教授法」による指導を受けている。

### 3.5 実施授業と実施環境

「総合的な学習の時間」の選択科目「テレビドラマで英語学習」で2016年9月～12月の計8回実施した。授業全回が成績評価に無関係であることを生徒は理解している。

実施した教室は学校内で唯一電子黒板やタブレットなどを使用できる環境である。研究実施校では、プロジェクターとパソコンを用いた授業を行う際に部屋を暗くし、文字や映像の解像度を高くするなどの工夫が必要である。そのため、実際にはパソコンの内容を黒板に投影する授業はほとんど実施されていない。

### 3.6 使用言語と英文内容理解の確認

参加している生徒のレベルを考慮し、英語と日本語を用いた。ドラマは音声を英語にし、字幕は日本語にした。これはドラマを背景知識として使用したためである。

また、本研究授業では必要とされる説明は日本語だが、単語の定義や簡単な指示などは英語にした。また、黒板に映し出す文字は英語を多く用いた。

生徒が英文の内容を理解しているか否かは、要約の内容であるRCPの答え合わせの際に生徒と教員との積極的なやりとりで確認した。授業で扱う英文を一文ずつ日本語に訳すことはしていない。

### 3.7 教材

センゲージ出版の *Mystery Tour with Sherlock Holmes* にある *The Adventure of the Copper Beeches* である。これは通常大学の一般教養で使用されるが、コミュニケーション英語IIIの『クラウン』と比較すると十分に使用できると判断した。

### 3.8 目標語の設定とその背景

目標語となる単語の設定は通常未知の語とするが、本研究では生徒が学習している単語帳に載っている単語から未知の語と推測されるものを選んだ。理由は、本研究前2016年6月に実施した「語彙と読解に関するアンケート」で、「単語の勉強をしているのに、模試などの長文になると読めないと感じたことはありますか」という問いに「英文を読めない」と感じる生徒が28名中26名92.8%もいたからである。つまり、単語を学習しているつもりだが、身についていないと感じているのである。

実際に生徒がどのように単語を覚えているかは、生徒が実際に使用している単語帳、Z会出版『速読英単語（必修編）』に関するアンケートの回答で明らかになった。単語帳は英文の文脈から単語を覚えることができるように作られているが、「文脈から単語を覚える」生徒は一人もいなかった。また、「単語のリストのみで覚える」と答えたものは78%で、「単語のリストと文脈の両方から単語を覚える」と回答したものは12%であった。

このような背景から、単語帳にあり生徒にとって馴染みのある単語と、そうでない単語を含めて目標語の20語を決めた。表1にある通りである。『速読英単語（必修編）』によれば、英単語はZ会が実際の入試で出題されたものをコンピュータで調べ、その頻度から重要と判断されたものが選ばれている（p.9）。生徒が覚えるべき単語の重要度は、「必須語」が最も高く、次いで「重要語」、「派生語・関連語」の順になる（p.9）。単語帳にない目標語は、表1にあるように頻度レベルの欄は空欄になっている。目標語を学ぶ空所補充問題は、*The Adventure of the Copper Beeches* 付いている別冊の exercise の部分を参考にした。

表1 「目標語20語」

	目標語	頻度レベル (空欄は単語帳にない単語)
1	governess	
2	suit	派生語・関連語
3	refuse	必須語
4	will	
5	sneak	
6	suspicion	重要語
7	contain	必須語
8	prisoner	派生語・関連語
9	throat	派生語・関連語
10	persuade	重要語
11	sacrifice	重要語
12	whim	
13	innocent	重要語
14	deserted	重要語
15	footsteps	
16	annoyance	派生語・関連語
17	cellar	
18	struggle	必須語
19	entitle	重要語
20	ladder	重要語

### 3.9 学習内容および手順

研究を調査するものと授業を行うものは同一人物である。1 日目は、テレビドラマをすべて観た。2 日目と 7 日目及び 8 日目はテストとアンケートを実施した。従って、研究授業は 3 日目から 6 日目の授業である。4 回の授業内容はほぼ同一の内容である。生徒は、本の内容と対応する箇所のテレビドラマを背景知識として観た後に、430 語前後の物語を読み、130 語前後の物語の要約となる RCP の活動を中心に行った。学習内容と手順は次の表 2 にある通りである。また、ワークシートにある RCP の問題の一例は図 1 にある。

表 2 実施内容と手順を示す一覧表

1 日目 9/8	映画を一通り見る
2 日目 9/15	1) pre-test として調査対象語の「四択語彙テスト」(10min)、「あらすじの空所補充テスト」(20min) を実施 2) テキスト①～④の英文を渡し、授業までに読んでくるよう指示をする。
3 日目 10/6	テキスト① (図 1 参照) 1) 英文に相当するテレビドラマを観る (約 5min)。 2) パワーポイントを使い、クラスで目標語、派生語などを確認する。いくつかの目標語をヴィクトリア朝の特徴や語源と合わせて理解する (約 10min)。 3) テキスト①を読みながら、目標語が含まれたあらすじの問題 (RCP) のワークシート① (図 2 参照) を生徒が各自取り組む (約 10min)。 4) クラスで答え合わせをし、単語や内容について確認する (約 10min)。 5) RCP の音読の練習をする。具体的には電子黒板に投影されているあらすじの英文の文字をパワーポイントで消えていくように設定し、それに合わせて音読する (約 5min)。 6) 次回の授業について確認する (約 5min)。
4 日目 10/12	1) テキスト①で学んだ語彙の小テスト (ワークシート①の問題) を実施 2) テキスト②を用いて、3 日目とほぼ同じスタイルの授業を実施
5 日目 10/27	1) テキスト②で学んだ語彙の小テスト (ワークシート②の問題) 2) テキスト③を用いて、3 日目とほぼ同じスタイルの授業を実施
6 日目 11/10	1) テキスト③で学んだ語彙の小テスト (ワークシート③の問題) 2) テキスト④を用いて、3 日目とほぼ同じスタイルの授業を実施
7 日目 短縮授業 11/24	1) post-test として「あらすじの空所補充テスト」を実施 (20min) 2) 「Sentence level C-test」を実施 (10min) 3) インターネットなどの動画を使用した自学自習に関する具体例の提示 (10min)
8 日目 12/1	1) post-test として調査対象語の「四択語彙テスト」(10min) 2) 「あらすじを書くテスト」実施前説明 (約 10min) 及びその実施 (20min) 3) アンケート (10min)

当初の予定は9回の授業であったが、行事などの都合で1時間分授業が削られた。そのため、テキスト④の小テスト（ワークシート④の問題）を実施することができなかった。

図1 テキスト①（高校生が読んだパッセージの一部）

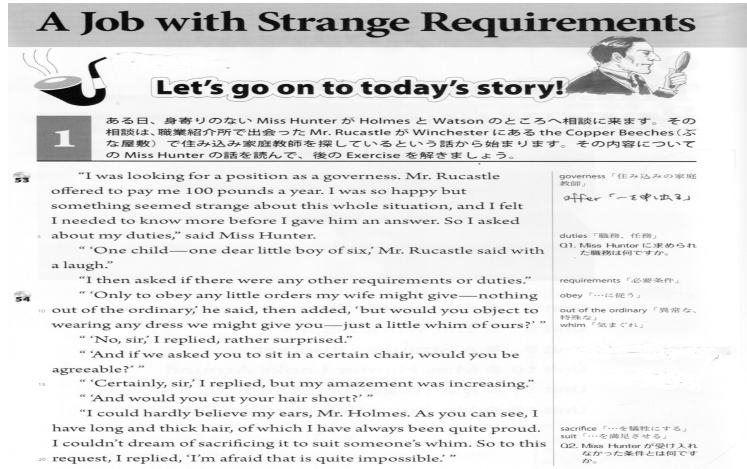


図2 テキスト①のワークシートにあるRCP

【語群】の意味をクラスで確認後、( )に入る最も適当な英語を【語群】の中から1つずつ選び、解答欄に答えを記入しなさい。

Mr. Rucastle offered Miss Hunter a position of 1) ( ) at the Copper Beeches in Winchester. He 2) ( ) to pay a lot and her 3) ( ) would be just to take care of one boy. She would have to 4) ( ) any little orders Mrs. Rucastle might give. Miss Hunter agreed but he asked her to cut off her hair, too. She thought it was strange. She couldn't dream of 5) ( ) her hair to 6) ( ) someone's 7) ( ).

So, she 8) ( ) to take the job. Later she received a letter from Mr. Rucastle. It said they would 9) ( ) her salary to 120 pounds a year. Finally she 10) ( ) this offer.

However, she was not sure what these conditions could mean. She send a 11) ( ) to Sherlock Holmes and Dr. Watson to ask their help and get some 12) ( ).

【語群】

advice	whim	accepted	refused	obey	sacrificing
duty	telegram	offered	suit	increase	governess

### 3.10 テストの採点基準

テストは4種類、「四択語彙テスト」、「あらすじの空所補充テスト」、「Sentence level C Test」、そして「あらすじを書くテスト」である。最後の「あらすじを書くテスト」以外はすべて完全解答である。配点は1問1点とした。

「あらすじを書くテスト」に関しては、物語全体ではなく、ある場面だけに特定した。ま

た、条件として目標語を使用し、問いに答える形であらずじを書くように指示をした。このような点を考慮して採点基準を設けている。目標語（8 語）を使用している場合には単語 1 語につき 1 点とした。6 つの問いに答える形で英文を書き、英文自体にはほとんど問題がなく、意味の通る場合には一文につき 2 点である。計 20 点満点とした。ただし、大きな文法的誤りがある場合には減点 1 点とした。

なお、先行研究ではテストの前に数回「あらずじを書く練習」をしているが、本研究では授業時間数の都合上、研究授業 8 回のうちの 1 日目から 7 日目まで「あらずじを書く練習」は実施できなかった。生徒は「あらずじを書く練習」をしないで、研究授業最終日の 8 日目に「あらずじを書くテスト」を受けた。

## 4. テストとアンケートの結果と分析

### 4.1 「四択語彙テスト」

「四択語彙テスト」は 10 分間のテストで 20 点満点である。テスト内容は図 3 に一部がある。pre-test の正答率 57.7%は、post-test の正答率 91.6%になった。テストは多くの生徒にとって馴染みのある形式であったと考えられる。

注目すべき点は 3 点ある。1 つ目は、pre-test と比較して post-test における正答率の高さである。2 つ目は、pre-test と post-test 実施には 3 か月の間隔があったにもかかわらず、持続率が高かったことである。3 つ目は、目標語の中で“governess”と“cellar”の解答率が最も大きく変化した点である。これらの単語は生徒が用いている単語帳にはない。受験に対応した単語帳を生徒は用いているため、特に“governess”の意味を知らないのは当然のことである。“governess”に関しては、pre-test では「政治家」や「支配者」という選択肢を選ぶ生徒が多かった。これは、単語帳には govern が「(政治的に) 支配する」という意味があり、governor に「支配者」や「知事」という意味があるために、そのような単語と混同したと考えられる。しかし、post-test ではほとんどの生徒が「女家庭教師」と答えられている。また、cellar に関しては「細胞」と答えている生徒が多かった。cell (細胞) は単語帳にのっている単語である。post-test ではほとんどの生徒が単語の意味を理解していることが分かった。

「四択語彙テスト」における受容語彙数の増加の可能性は 3 点考えられる。まず、解答率が最も高くなった“governess”と“cellar”に関しては、ヴィクトリア朝の特徴となる階級や当時の女性の仕事や暮らしの説明を映像から学び、ドラマを実際に観ることでスキーマが活性化され、生徒は受容語彙数を伸ばすことができたのではないだろうか。次に、受容語彙全体の伸びに関しては、RCP を含んだワークシート及び小テストを実施したことが、受容語彙数の増加に影響を与えたことは十分に考えられる。さらに、3.8 で述べたように、研究授業に参加している生徒の 78%が「一つの英単語に対して一つの日本語の意味を覚えること」に慣れているために「四択語彙テスト」の得点が高かったと考える。

しかし、背景知識としての映像の提示、ワークシートや小テストの実施、単語のリスト式

学習だけで、果たして pre-test と間隔が 3 か月空いている post-test で 91.6%の正答率の高さや持続率を維持できるであろうか。次の 4.2 「あらすじの空所補充問題」で受容語彙数の向上とその持続に關しての糸口を掴むヒントが得られると考える。

図 3 「四択語彙テスト」一部

1) cellar			
ア 天井	イ 細胞	ウ 独房	エ 地下室
2) suit			
ア を要約する	イ 自殺する	ウ に合わせる	エ を呼び寄せる

## 4.2 「あらすじの空所補充問題」

「あらすじの空所補充問題」は 20 分間のテストで 35 点満点である。このテストは図 4 の通りである。「四択語彙テスト」と同様に、pre-test と post-test 実施には 3 か月の間隔があった。pre-test の正解率は 17.8%であったが、post-test の正答率は 43.4%となった。「あらすじの空所補充問題」は 449 語からなり、4 つのワークシートを主に組み合わせたものであるが、内容を一貫させるために、本研究の授業担当者が英文を一部削除または追加したもので構成されている。つまり、ワークシートとまったく同じ問題ではない。具体的には、授業で実施したワークシート（図 2 参照）と類似点があるものの、言い回しが異なるものも含まれている。また、目標語の 20 語以外の単語 15 語も加えられている。テストでは目標語は語群にして提示し、目標語以外の単語は最初のアルファベットのみで提示した。

post-test で一番大きな成績の伸びが見られたのは、私立中堅大学を目指すコースivの女子生徒である。特に生徒 L、P、T は、pre-test（35 点満点）でそれぞれ 4 点、5 点、4 点であったが、post-test（35 点満点）では 21 点、22 点、23 点をとっている。偏差値に換算すると生徒 L は 44.9 から 56.7、生徒 P は 47.2 から 57.9、生徒 T は 44.9 から 59.0 に変化した。同生徒は、前項目 4.1 の「四択語彙テスト」の post-test でも 20 点満点中 20 点、18 点、20 点という好成績を出している。

「あらすじの空所補充問題」（35 点満点）の post-test で得点が高い生徒は習熟度の高いコースi、ii、iiiに多く、10 名中 7 名が 20 点以上であった。習熟度の高いコースの生徒の傾向として、既習の内容に類似した英文を読むことにはそれほど難しさを感じなかったと考えられる。生徒 J は、pre-test から post-test で偏差値の下がった生徒ではあるが、post-test では 30 点とクラスのトップであった。また全般的に他のテストでも概ね好成績であった。コースiiiの女子生徒 J は自分の勉強方法を確立しており、大学受験では現役で難関私立大学に合格している。また、コースiiの女子生徒 B とコースiiiの女子生徒 H の解答用紙には、“but” や “however” などのディスコース・マーカーにマークを付けたり、スラッシュなどを入れて読み進め、英文の構造を確認している形跡があり、日ごろどのように長文に対処しているかを垣間見ること

ができる。

先に述べたように「あらすじの空所補充問題」は4つのワークシートを単に合わせたものではない。問題内容に多少の変化があること、4つのワークシートを行った期間に間隔があることを考慮すると、post-testで好成績をあげられた生徒は単に「一つの英単語に対して一つの日本語の意味を覚えたこと」だけによる可能性は低い。また、背景知識としての映像の提示、ワークシートや小テストによる学習だけでも不十分である。「RCPに付随する他の活動」からの影響があることは否めない。例えば、前後の文脈から空所に何が入るかを理解できるように、黒板にテレビドラマの場面と物語のパスセージを比較提示し、教員と生徒との積極的なやりとりをして解答を行った。さらに、黒板に投影されたパスセージの語が消えていく順にコーラスリーディングをする音読の影響がインプットにつながった可能性がある。このような多角的な指導が、結果として受容語集数の向上及び持続につながったと考えられる。

図4 「あらすじの空所補充問題」の一部

Q. 下の指示に従って ( ) 内に英単語を一語入れてあらすじを完成させなさい。( ) 内にアルファベットのあるものは、それから始まる単語で答えなさい。また、それがない場合には【語群】から最も適当な単語を選び答えなさい。

Miss Hunter was offered a position to work as a 1) ( ) in Mr. Rucastle's country house. Her job was to 2) ( t ) a boy. Miss Hunter was told to wear a blue 3) ( d ) and cut her 4) ( h ) short to work there. She couldn't dream of 5) ( ) her hair to 6) ( ) their 7) ( ). At first she 8) ( ) Mr. and Mrs. Rucastle's requests, but finally accepted them. However, Miss Hunter was not 9) ( s ) why they asked her to do these things, so she went to see Holmes and Watson for some 10) ( a ). Holmes told her that he would 11) ( h ) her if he got a telegram from her.

【語群】

sneaked	suit	deserted	prisoner	entitled
suspicion	contained	innocent	sacrificing	annoyance
cellar	struggling	will	persuaded	the throat
ladder	refused	whim	footsteps	governess

#### 4.3 「Sentence Level C-test」

「Sentence Level C-test」は10分間のテストで40点満点である。テストは図5にある通りである。このテストは、Leeによると内容の異なる英文で適切な目標語を空所に書き込むことができるかどうかを検証するテストであり、発表語彙の習得を測るテストとしている(p.647)。英文の下には単語の定義が英語で書かれており、空所には目標語の最初のアルファベット2, 3文字が書かれている。

このテストの正答率は 40.6%であった。注目すべきは、中堅私立大学を目指すコースivの女子生徒2名（生徒QとT）の得点が上位クラスの生徒（1名を除く）より上回っていた点である。生徒QとTは40点満点中それぞれ32点と31点である。偏差値から見ると66.9と65.9である。この2名は「単語学習方法アンケート」によると、「一つの英単語に対して一つの日本語の意味で覚える」というリスト式で学習しており、また「書いて覚える」という点が共通していた。リスト式で覚えることはスペルを正確に書くことを鍛える可能性があることが分かる。また、このテストはpre-testでは実施しておらず、生徒にとってあまり馴染みのないテスト形式であったにもかかわらず正答率が低くなかった。これは、受容語彙が習得できているからこそ、このようなテストで正答率が高くなった可能性があると考えられる。

しかし、一方で、「Sentence Level C-test」には空所に最初の文字が書かれていること、語彙の定義が英語で書かれていること、一文の英文の中の空所補充問題であるためにテスト自体が生徒の発表語彙を測るとは言い難い。高梨・卯城（2000）は、Laufer（1998）の語彙知識の分類を例にあげ、「Sentence Level C-test」のようなテストを制限発表語彙（controlled active vocabulary）とし、発表語彙とは異なるものと定義している。さらに、受容語彙と制限発表語彙との間には高い相関性が見られるが、発表語彙にはどれとも相関性が認められなかったとしている（p.45）。実際に、次の項目ではそれが明らかになった。

図5 「Sentence Level C-test」の一部

<p>Q 空所に入る単語は授業中に学んだ単語である。</p> <p>問題の下にある（ ）内の定義に合うように空所にあるアルファベットで始まる単語を書き入れなさい。</p> <p>1) In the movie, Maria was a （ gov ） to the Trapp children. （ woman who is employed to teach young children in a private family ）</p> <p>2) I sometimes （ sac ） my free time to her husband's interests and welfare. （ to give up one thing for another thing considered to be of great value ）</p>
--

#### 4.4 「あらすじを書くテスト」

このテストは20分間実施したテストで、20点満点である。内容は図6にその一部がある。テスト実施時間を確保するために、学習したワークシートの③と④をまとめて書かせることにした。それには理由は2つある。1つ目の理由は、ワークシート③は同じ内容の小テストを行っていたが、ワークシート④は小テストを実施していないことである。これにより何かしらの影響があるかどうか確認するためである。2つ目の理由は、授業最終日の8日目に「あらすじを書くテスト」を実施したが、1日目から7日目までの間にあらすじを書く活動をしなかったことから、映像などの背景知識や授業中のRCPの活動のみによって発表語彙が獲得されるかどうかを純粹に確認できると考えたからである。

結果は、4つのテストの中で最も正答率が低く 22.9%であった。20 点満点中で 10 点以上となった生徒は 28 名中 5 名であった。とくにコースiv、vの生徒の得点は 1 点～5 点とかなり低い結果となった。このような結果を見るかぎり、小テスト実施の有無はあまり影響が見られなかったと考えられる。さらに、多くの生徒が日頃から英文を書くことに慣れていない可能性が高いことが示唆される。特に習熟度の低いコースの生徒では、背景知識や授業中の RCP の活動は発表語彙数に影響を与えていない。たとえ英文が書けても、間違いの少ない英文を書くことができていなかったために点数につながらなかった。抜き打ちで「あらすじを書くテスト」をすることは初級レベルの生徒には非常に難しいことを示している。

「四択語彙テスト」、「あらすじの空所補充問題」で点数の伸びがあった生徒 L、P、T や「Sentence Level C-test」で点数の良かった生徒 Q、T も、「あらすじを書くテスト」の結果は良くなかった。20 点満点中生徒 L は 1 点、生徒 P は 5 点、生徒 Q は 3 点、生徒 T は 3 点であった。4.3 で確認したように「受容語彙と制限発表語彙との間には高い相関性が見られるが、発表語彙はどちらも相関性が認められなかった」ことが一部当てはまる例であると言える。

図6 「あらすじを書くテスト」の一部

<p>問題 下の文は <i>the Copper Beeches</i> の後半部分の一部です。<u>それに続くように英語で「あらすじ」を書きなさい。</u></p> <p>「ぶなの木屋敷には塔 (wing) が一つありました。パイレット・ハンターはトラーが鍵を掛け忘れているところを目撃します。そして好奇心に駆られて塔の中に入っていきます。部屋には鍵がかかっていたのですが、足音が聞こえドアの下の際間から人の影が見えました。ハンターは慌てて逃げますが、そこでルーキャッスル氏に見つかってしまいます。そして二度と塔に入ってはならないと脅かされます。ハンターはどうして良いのか分からず、ホームズ達に助けを求めました。ホームズはブナの木の家 ( <i>the Copper Beeches</i> ) に向かい真相を解明すべく推理を始めます。」</p> <p><u>「あらすじ」を書く際には次の指示に従いなさい。</u></p> <p>①【語群】の単語を用いること。②下の問い答える形で「あらすじ」を書きなさい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. What was Holmes' reasoning?</li> <li>2. Why did Alice have large income?</li> <li>3. Alice left everything in Mr. Rucastle's hands. Why did she do so?</li> <li>4. What will happen to Alice's husband if she gets married?</li> <li>5. Why did Mr. Rucastle try to make Alice sign a paper?</li> <li>6. What did Mr. Fowler, Alice's fiancé, do to save Alice?</li> </ol> <p>【語群】 innocent / ladder / entitle / impersonate / prisoner / governess / will / persuade</p>
--

次の英文はテストで高得点をとったものである。得点を偏差値換算すると、コースiiの生徒

C とコースivの M はともに 70.4 である。次の英文は実際に生徒が書いたものをそのまま転記したものである。下線部と番号は注目すべき英文として授業担当者（本研究）が付けたものである。

#### 生徒 C のあらすじ

Holmes reasoning was that Mr. Rucastle tried to make Mr. Hunter ① impersonate Alice and work as a governess. He tried to get Alice's large income from her will. She left everything in Mr. Rucastle's hands because she was innocent. If she gets married to her fiancé, he will share the income with her and Mr. Rucastle won't be able to get her income. Mr. Rucastle tried to get Alice to sign a paper so that she will not marry her fiancé.

#### 生徒 M のあらすじ

② Miss Hunter worked at Copper Beeches. ③ Her job was a governess. ④ She took care of a boy. ⑤ Mr. Rucastle persuaded Alice into entitling him to receive her mother's money. But Alice refused that because her mother's will said that she will be entitled to receive the money. Alice loved a man. If she gets married, his husband will get the money. So, he asked Alice to make a sign, but she also refused it. Mr. Rucastle was annoyed and order her to enter a deserted room as if she is prisoner. ⑥ Her fiancé's project is to use a ladder.

2名のあらすじを見ると、Lee (2008) にあるように、テキストにある英文を読むこと、ワークシートにある RCP の活動を行うこと、授業中の教員と生徒とのやりとりが影響を及ぼした可能性がある。最も興味深いのは次の3点である。

1つ目は、下線部①の単語“impersonate”を使用している点である。この単語は目標語ではなく、本文や RCP の英文に含まれた単語であった。授業中に意味を知っている生徒がいなかったこと、単語帳には含まれていないこと、黒板で語源を示すなど生徒の理解につながる授業を行ったことなどから考慮すると、映像、RCP の活動、教員と生徒とのやりとりのいずれかが、多かれ少なかれ影響を与えた可能性があると考えられる。

2つ目は下線部⑤、⑥である。生徒 M は、テキストやワークシートを応用し、既習の英語などを使用している可能性があると考えられる。

3つ目は、生徒 C は問いに答える形で「あらすじ」を書こうとしている様子が見受けられる一方、生徒 M は問いに含まれていない英文②、③、④を入れるなどして、意味の通るあらすじを自分なりに書いている点である。また、生徒 M は授業に積極的に参加し、よく発言をしていた。

「あらすじを書くテスト」は、英語の得意な生徒にとってはそれほど高度な課題ではなかったと考える。学習したものをどのように理解し、それを消化し、表現するかは、生徒によって様々であることが検証できた。インプットからアウトプットまでの過程を知ることができるのは、生徒だけでなく教員にとって非常に意義のあることである。通常の英語の授業で、スピーキングやディスカッションなどのアウトプットを行う機会が少ない場合には、このようなあらすじを書くタスクをより多く導入することは重要であると考えられる。授業中の活動に

入れるには工夫が必要であるが、初級、中級レベルにも与えるべきタスクであると思われる。

#### 4.5 アンケート

アンケートの1つ目の問いは「ドラマを用いた授業をどのように思いましたか。またその理由を書きなさい」である。「とても良い」と答えた生徒は18%、「良い」は50%、「普通」は32%であった。「あまり良くない」と「良くない」と回答した生徒はいなかった。ドラマを使った授業が良かったと回答した理由で多かったものは、「英語を楽しく学べたから」、「普段とは違った形で単語を覚えられたから」であった。これは、ドラマを使った授業は新鮮で興味深かったことや英語の学習意欲がわいた可能性を示唆している。また、「電子黒板を用いた授業をどのように思いましたか」という回答には、「授業がスムーズに進んだ」や「電子黒板は見やすい」などその効率性と機能性に注目している回答が多かった。電子黒板はコンピュータとプロジェクターを用いた場合とは違い、部屋を暗くするなどの環境の変化をすることなく、テレビドラマの映像と英文のテキストを同時に投影できる。こうした点が、スピーディな授業を実現でき、生徒の集中力を持続させ、学習の動機づけにつながった可能性がある。これは、電子黒板の教育的メリットの一つと考えられる。「普通」と回答した生徒の理由は「座席によって電子黒板が見にくいから」であるが、これは改善の余地がある。

2つ目の問いは、「RCPに関する意識調査」である。具体的には、「ドラマを観た後実施した今回の空所補充問題は語彙定着に役立つと思いますか。またそれはなぜですか」という内容である。なお、授業ではRCPという表現は使わず、生徒に馴染みのある空所補充問題という言葉を使用した。結果はクラス全員が肯定的な回答であった。そして、その理由で最も多かったものは、「ドラマを観た後だと、空所に入る単語はストーリーの流れとともに覚えられから良いと思う」や「空所に入る単語を前後の内容から判断できるようになった」といった回答であった。これは「情報のかたまり」、つまり「チャンク」で生徒が覚えていることを示唆している。

3つ目の問いは、「RCPとどのような活動とともに行うことで、より語彙習得が効果的になると思うか」である。その回答の選択肢として最も多かったのは「ドラマの内容を思い出しながら、英文を読みかえすこと」で、28名中17名の生徒が英文を読む際に背景知識としての映像の役割を意識していると言える。また次に多かった回答では、15名の生徒が「クラス全体で単語の意味などを確認すること」と回答している。

#### 4.6 RCPと語彙学習及び内容理解への可能性

テスト結果とアンケート結果から次の点が確認できた。

1つ目は、背景知識を与えた後のRCPを中心とする活動が学習者の受容語彙数に大きな影響を与えたことが明らかになったことである。具体的には、受容語彙数の習得率の高さと持続率の高さが「四択語彙テスト」と「あらすじの空所補充問題」のpre-testとpost-testの比較

を見ると明確である。Laufer and Osimo (1991) は RCP による習得語彙の持続性に関して、英文の要約を行う際の学習者の心的プロセス (mental processing) に注目している (p.221)。それは、読みをより深く入念に行った心的プロセスは記憶に深く刻まれていき、持続可能になるということである。RCP の語彙習得への有効性に関して、Lee は読む内容次第では、学習習熟度のレベルに関係なく起きるものであるとしている (p.652)。本研究においても RCP の活動が上級レベルの学習者にとって受容語彙数にも発表語彙数に影響があったように見受けられる。しかし、上級レベルの学習者は、本研究授業以外にすでにある程度のレベルまで到達していると考えられるため、それを考慮する必要がある。また、初級レベルや中級レベルの学習者にとっては、今回のようなテレビドラマを背景として英文を読み、要約を行う RCP の活動を中心とするタスクなどでは、受容語彙数を伸ばすことができても発表語彙数を伸ばすことは難しかった。

2つ目は、RCPにおける語彙学習に関するアンケートの回答である。4.5にも示したように、アンケートの「RCP と他のどの活動が語彙習得に役立つと思うか」で多かった回答は、「ドラマの内容を思い出しながら本文を読んで問題を解くこと」と「クラス全体で目標語の意味を確認すること」である。これは、生徒が英文の背景知識を得たこと、教員と生徒との双方向授業の中で目標語を中心とした英単語の意味を理解したことが、英文を読む動機付けとなり、最終的には英文の内容理解につながった可能性を示唆している。通常の英語の授業では、英文を一文一文訳す指導法である「文法訳読式教授法」を受けている生徒にも本研究授業が有効に働いた。

## 5. まとめと今後の課題

英文を読むことを通して語彙習得をするという具体的な目標達成のために RCP を用いた。しかし、タスクは RCP だけではない。背景知識としてテレビドラマを観ること、RCP を用いた要約文の作成とその音読、小テストなどのタスクを複数組み合わせたもので構成されている。さらに、授業は、教員と生徒間の双方向の対話型授業で進められた。このような多角的な指導法によって授業は単調にならず、また決まった学習手順によって生徒のスキーマはさらに活性化したと言える。それが単語と英文理解の架け橋になった可能性がある (Carrell, 1984)。生徒はこうした研究授業を通して、「文法訳読教授法」だけでなく、それ以外のリーディング・ストラテジ (方略) を体験し、結果をモニターし、評価をする「メタ認知的方略」(門田編者, 2003) につながる経験ができたと考えられる。これは、自律的な学習者の育成となり、今後の教育にさらに必要とされるものである (ベネッセ教育開発センター, 2012)。

しかし、テレビドラマなどの背景知識を与えることや RCP などの活動が必ずしも語彙習得や内容理解につながるとは限らない。例えば、Stal, Jacobson, Davis, and Davis (1989) は、語彙のレベルが生徒のレベルに比べてあまりにも高い場合や背景知識が内容理解につながるものではない場合には、背景知識と語彙習得の密接な関係がないこと (p.41) を示している。

Carrell (1984) は、RCP で単語を文脈から推測するのが困難な事例を示している (p.336)。それゆえ、例えば、「映画とそのアダプテーションとなる本」もしくは「本とそのアダプテーションとなる映画」を用いて語彙力の増加、読む動機付け、さらには読解力の向上を高める授業を行う際には次の3点が重要であると考えます。まず、「ドラマや映画などの映像と本の内容」がリンクしていることである。次に、教材のレベルは生徒の習熟度と授業の目的を考慮して設定をすることである。最後に、効果的なタスクを教員がきちんと見極めることである。

2020 年度から始まる入試では、「読むこと」、「書くこと」、「話すこと」、「聞くこと」の4技能が含まれている。大きな変化に柔軟に対応する必要のある英語教員は、更なる授業の工夫が求められている。今後はテレビドラマや映画などの映像と本を使った授業の分析手法の改善も考慮しながら、日本国内だけでなく海外の言語習得の研究を継続して行い、高校の教育現場の先生が実践できる授業の提案をしていく。誰もが使えるドラマや映画を使った授業やRCPを使った授業の有効性をより深く極めようとする研究は、今後の英語教育の一つの指導法として大きく寄与するものと考えられる。

## 註

- <sup>1</sup> 2015 年 11 月～12 月に高校 1 年生 133 名を対象に 4 回実施した。シャーロック・ホームズの映像、ビデオ、アダプテーションの本 (Oxford University Press Bookworms) を用い、多角的にタスクを与えることで英語を読む動機付けにつながるかどうかを検証した。「読む前の活動」では、映像を通して物語の登場人物、作家コナン・ドイル、作品を理解するのに必要なヴィクトリア朝のキーワードを学んだ。本の内容にリンクしたビデオを観た後の「読んでいる間の活動」では内容理解の二択問題 (T/F 問題) を解いた。「読んだ後の活動」ではディクテーション問題、ビデオのスクリプトと本の内容比較などを行った。分析方法は、回収したワークシート、アンケート、インタビューからである。結果は、授業を通して英文を読む動機づけにつながっていることが明らかになった。さらに、映像と本を用いた授業では、「読むこと」、「聞くこと」、「書くこと」、「話すこと」、「語彙」の力の向上を示唆する内容であった。

## 参考文献

- 卯城祐司 (2009) 『英語リーディングの科学 「読めたつもり」の謎を解く』 研究社
- 大田悦子 (2013) 「高校における文法訳読式授業を考える：現状と課題」 『白山英米文学』 pp. 41-52.  
『東洋大学学術情報リポジトリ』
- 門田修平 (編者) (2003) 『英語のメンタルレキシコン 語彙の習得・処理・学習』 松柏社
- 風見寛 (2013) 『速読英単語 1 必修編 (改訂版 6 版)』 Z 会出版
- 金澤洋子 (2013) 岡秀夫編者 『グローバル時代の英語教育——新しい英語科教育法——』 成美堂
- キープ株式会社 (2009) DVD 『シャーロック・ホームズの冒険 ふなの木の屋敷の怪』 及び付属スクリプト英日対訳ブック

- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2009) 『英語教育用語辞典』 大修館書店
- 高梨康雄・卯城祐司 (2000) 『英語リーディング事典』 研究者出版
- ベネッセ教育開発研究センター (2012) 『VIEW 21 特集：自立した学習者を育てるために生徒の学習観を変える』, Vol.3. 中学版
- 文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』
- 吉田研作・宮崎秀太 (2011) 「英語教育の目標の変化と教育現場の対応」 *ASTE*, 59 号, pp.43-48. 上智大学英語教育研究会
- 渡辺時夫 (編者) (1996) 『新しい読みの指導——目的を持ったリーディング』 三省堂
- Alderson, C. (2000). Assessing reading. Cambridge University Press.
- Bahous, R. (2011). Motivating Students in the EFL Classroom: A Case Study of Perspectives. *English Language Journal*, Vol. 4, No. 3, 33-43.
- Carrell, P.L. (1984). Schema Theory and ESL Reading: Classroom Implications and Applications. *The Modern Language Journal*, Vol. 68, No. 4, 332-343.
- Carrell, P.L. (2000). Interactive text processing: implications for ESL/second language reading classrooms. *Interactive Approaches to Second Language Reading* (pp. 239-259). Cambridge University Press.
- Dömyei, Z. & Ushioda, E. (2011). *Teaching and Researching: Motivation*. Pearson Education Limited.
- Gorsuch, G (2001). Japanese EFL Teacher's Perceptions of Communicative, Audiolingual and Yakudoku Activities: The Plan Versus the Reality. *Education Policy Analysis Archives*, Vol. 9, No.10.
- Honeyfield, J.G (1987). Word frequency and the importance of context in vocabulary learning. In M.H. Long & J.C. Richards (Eds.). *Methodology in TESOL: A book of readings* (pp. 318-324). Boston: Heinle & Heinle.
- Koda, K. (2005). *Insights into Second Language Reading*. Cambridge University Press.
- Laufer, B. & Osimo, H. (1991). Facilitating long-term retention of vocabulary: The second-hand cloze. *System*, Vol. 19, No. 3, 217-224.
- Laufer, B. (1998). The development of passive and active vocabulary in a second language: Same or different? *Applied Linguistics* 19, 2: 255-271.
- Lee, S.H. (2008). Beyond reading and proficiency assessment: The rational cloze procedure as stimulus for integrated reading, writing, and vocabulary instruction and in ESL. *System*, Vol. 36, No. 4, 642-660.
- Lee, S.H. (2009). Vocabulary and Content Learning in Grade 9 Earth Science: Effects of Vocabulary Preteaching, Rational Cloze Task, and Reading Comprehension Task. *The CATESOL Journal*, 21 (1), 75-102.
- Stal, S.A., Jacobson, M. G, Davis, C. E. & Davis, R. L. (1989). Prior knowledge and difficult vocabulary in the comprehension of unfamiliar text. *Reading Research Quarterly*, 24 (1), 27-43.
- Uemura, A. & Yamashita, M. (2015). *The Adventure of the Copper Beeches in Mystery Tour with Sherlock Holmes*. CENGAGE Learning.